



名寄市立大学の窓から知への誘い

「子どもの変化を考える」

保健福祉学部教養教育部 教授 加藤 隆

vol.10

子どもの変化はいろいろな側面から見ることができ

ます。例えば、明治33年の11歳の平均身長は127cm、平成24年の11歳では145cmです。これは飛躍的な成長です。他方、残念な変化もあるでしょう。学校保健統計調査によると、北海道の子どもは肥満傾向が全国の中でも顕著ですし、昨今では、学力低下が大きな課題として報じられています。

数年前に、ユニセフがOECD加盟国の15歳男女を対象に行った意識調査によると、日本の子どもたちが断トツだった項目が二つありました。

一つめは、「孤独を感じる人が多いか」との質問に対して、30%が「はい」と答えていることです。ちなみに、他の国では半数です。三人に一人が孤独に苛まれているという社会は決

して健全ではありません。

子どもたちが孤独を感じる背景にはいろいろな理由があるのでしようが、「居場所」が見い出せないことが大きいと思います。学校には「七五三」教育という言葉の方があり、授業を理解している割合が小学校では7割、中学校では5割、高校では3割という実情から来ています。私も経験があります。分らない授業をじっと行儀よく聞いてるのは本当に辛いものです。このような子どもたちにとつては、学校や学級は心落ち着く居場所とはならず、孤独感を深めます。しかも、家に戻ってからも教師のような口調で責められるとしたら、いよいよ居場所を喪失してしまいます。

せないという文化が根付いています。日本では世間体を考えて形式的に進級させます。この辺も再考が必要ではないでしょうか。

ユニセフ調査で顕著だった二つめは、自分の将来への期待のなさです。「30歳になつたら、どんな仕事に就いていると思うか」に対して、「非熟練的な仕事への従事」と回答した子どもが50・3%でした。断トツの数値です。そこには、自分への諦めや後ろ向きな態度が漂っています。おそらく、この自己信頼や自尊心の脆弱状況こそが、近年の子どもたちの変化の根底にあるのではないのでしょうか。

このことと深く関連すると思えますが、かつては社会に多くの「親役」がいましました。取り上げ婆(産婆)、乳付け親(乳親)、名付け親、守親、婚礼の際の杯親

(仲人親) などです。多くの「親」の名を持つ大人が、子どもとかかわりを持ち、生涯にわたって見守る風土がありました。自分が温かい多くの眼差しの中にある安心感は、ソーシャル・レファレンシングと呼ばれ、特に幼少期の感情や感性の育ちに大きな影響を与えます。

子どもはいつも聞いてほしい、見てほしい、分かっています。そのような思いを持って子どもが後ろを振り返った時に、頷いてくれる誰かがいるか、いないかは、自己信頼や自尊心の形成に決定的に大きなことだと思います。



みなさん、こんにちは。地域交流センターです [地域交流センターのエコキャップ回収活動 (No 2)]

地域交流センターでは、ボランティア以外の活動としてエコキャップの回収もしています。ここ数年、地域の方からの受け入れが増えており、個人・団体・学校・企業・公共施設などで回収されたものが大学に持ち込まれます。昨年は合計で1087.2kgのエコキャップが集まりました。これはポリオワクチンだと90人分に相当します。

大学では飲料用のキャップのみを対象に、洗浄済みのものを回収しています。この条件から外れるキャップは学生が中心となり、分別や洗浄の作業を行っています。こちらに持ち込む時には、洗浄済みの状態で持参いただくと助かります。

その他に、毎週月曜日の北都新聞にコラム「名大の時間」を掲載していただいています。授業の様子、サークル紹介、大学生生活など、学生の様子などを知っていただく機会になればと思います。Airてっしでも「Info名大」という番組で、学生パーソナリティーが大学のさまざまな情報を発信しています。毎月第2・4・5月曜日の18時30分から19時までの放送です。時間がある方は、聞いてみてくださいね。

問い合わせ 地域交流センター(市立大学恵陵館1階)
☎01654②4194(内線2101道北地域研究所内)